

処理水放出、翌年の感無量

がん社会 を診る

中川 恵一

する水素の同位元素で、私たちは毎日「トリチウム水」を飲んでいますし、わずかとはいえ体内にも存在します。

ALPSでもトリチウムだけは除去できません。トリチウム水も水には変わりありませんから、「水のなから取り出す」ことが難しいのです。

トリチウムが出す、ごく弱いベータ線が到達できる距離（飛程）は平均で0.6センチ、最大でも6センチ程度です。細胞の大きさは約10センチですから、核の中のDNAへの影響

はほとんどありません。

実際、放出された水を毎日2リットル飲んでも、年間の被ばく量は年間自然被ばく（約2ミリシーベルト）の1000分の1余りにすぎません。放出後の周辺の海水のモニタリング結果をみると、トリチウム濃度はほとんどが1リットあたり10センチ以下で、世界保健機関（WHO）が定めた飲料水のガイドライン「1リットあたり1万センチ」を大きく下回っています。

仮に1リットあたり10センチの海水を毎日2リットずつ、1年間飲み続けたとしても、受ける放射線量は胸のレントゲン検査の400分の1とごくわずかです。人体や環境への放射線の影響は皆無といつてよいでしょう。

原発1基から放出されるトリチウムの量は年間100兆ベクレル超と、福島第1原発の放出計画の5倍近くに上る例もあります。全く理解に苦しみません。

国内では水産業者を応援しようという機運が高まっています。福島県いわき市の23年のふるさと納税額は前年の7割アップ。とくに常磐ものと呼ばれる福島県沿岸の海産物や加工品が人気ようです。禁輸の影響を大きく受けたホタテなどについても、販売促進のための催しが各地で開かれ、私も参加しました。

福島県の海水浴場では通常の水質検査に加え、放射能濃度の測定も実施しています。海洋放出前の値と変わっていません。いわき市では今月20日から4つの海水浴場がオープンしています。

私も先日、いわき市の勿来（なごこ）海水浴場を訪れ、海に入りました。その後、地場の海鮮料理と福島の地酒も頂き、感無量の思いでした。

（東京大学特任教授）

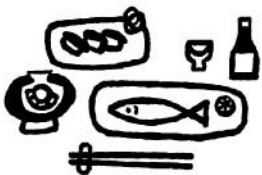


イラスト 中村 久美

東京電力福島第1原子力発電所の多核種除去設備（ALPS）処理水の海洋放出からまもなく1年となります。放出開始時点で1046基あった貯蔵タンクのうち、2024年度末までに空にできるのは30〜40基にとどまります。廃炉に向けた地道な作業が今後も続くこととなります。

ALPS処理水とは、事故で発生した汚染水からトリチウム以外の放射性物質を安全基準まで除去した水のことです。トリチウムは天然に存在